

名前 _____ 年 _____ 組 _____

記事A

トンブリ 海外普及も可能

応援大使・ふかわりょうさんに聞く

MCを務めるテレビ番組で大館市特産のトンブリを取り上げたことをきっかけに魅力にはまったタレントのふかわりょうさん(50)。2019年3月から「トンブリ応援大使」を務めるふかわさんに、トンブリの製造技術



大館市のトンブリ畑で東館小学校の児童と原料となるホウキギを収穫するふかわさん。2024年9月(いしころ舎 同会社提供)

が国の登録無形民俗文化財となる見通しとなった感想を聞いた。ふかわさんは「トンブリに光が当たった。ゆくゆくは海を越えて海外でも広まる可能性がある」と夢を膨らませた。

「オリジナル歌をリリースしたり、東館小学校の児童と一緒に収穫したりしてきた。

「トンブリ畑がなくなってほしくないという、ある意味で僕の無責任な願いでもあるけれど、応援してきたかいがあったなど。農家さんたちが喜んでくれて、トンブリ畑を今後も見られる可能性が高くなった。そういう光が当たったことが本当にうれしい」

「なぜトンブリに引かれたのか。いろいろな調べていく中で非常に栄養価が高いことや農家

さんが減っていることとかを知り、日本だけでなく海外にも認知されていていい食材として可能性を感じた。思いがあふれて曲を作ったりもしたけれど、大館の農家さんや子どもたちと交流させてもらうことで、より一層応援する気持ちが膨らんだ。トンブリを紹介した大館の人たちとの交流を大事にしていきたい」

「トンブリの現状をどう受け止めているか。

「秋田の食材といえば、きりたんぼといふりがっちは東京でもポピュラーだが、トンブリとなるとぐっと知名度が下がってしまう。ただ、知られていない



スーパーなどで販売されている大館市産のトンブリ。パッケージにはふかわさんが作詞作曲した「とんぶりの唄」のキャラクター「とんぶり兄妹」が描かれている

「産地継承に向けてどんな活動をしていきたいか。大事なのは農家さんや子どもたちの気持ち。単にノスタルジーで『なくしてはいけない』と外部から強要するのではなく、残したいという思いが自然と広がり、残していこうという

動きがあるなら、側面からサポートしていきたい。風が吹けばきっと一気に広がる。僕もトンブリが主役のお祭りを開いたりしたい」

△秋田魁新報2025年2月1日付より。記事は手直ししています▽

①

記事Aの「トンブリに光が当たった」という文中の、「光が当たる」という慣用句について、次の(1)(2)の間に答えましょう。

(1) 同じ意味で「光」が用いられている文を、次のア～エの中から一つ選び記号で答えましょう。

- ア 枝葉のすき間から光が差し込んでくる。
- イ 親の七光と陰口をたたかれぬよう努力する。
- ウ 彼の目から次第に光が失われていった。
- エ 過去の作品が改めて光を放つこととなった。

(2) この慣用句で用いられている「光」が意味する内容と同じ意味の熟語を、次の①～④の中から一つ選び記号で答えましょう。

- ① 希望
- ② 評価
- ③ 注目
- ④ 才能

②

記事A中の表現について、次の(1)～(3)の問いに答えましょう。

(1) 上の外来語が、記事の中で使われている意味と同じものを下の熟語から選び、線でつなぎましょう。

MC	郷愁
リリース	印象的
ポピュラー	支援
キャッチー	司会
ノスタルジー	人気
サポート	発売

□ □

記事B

社説 トンブリ文化財登録

継承と普及への弾みに

大館市特産のトンブリに新たな価値が加わるようになった。文化審議会が先月、「大館のとんぶり製造技術」を国の登録無形民俗文化財とするよう文部科学相に答申した。遅くとも3月中には官報告示をもって登録となる見通し。栽培・加工技術の継承や、食材としての普及への弾みとしてほしい。

国による無形民俗文化財の登録制度は2021年に設けられた。登録は同年の「讃岐の醤油醸造技術」（香川県）と「土佐節の製造技術」（高知県）が皮切り。先月答申されたとんぶり製造技術など2件を加えると、全国で8件となる。いずれも食に関わる技術で、本県からは初めての登録となる。

トンブリはハウキギの実で、プチプチとした食感が特徴。主に米代川流域で育てられ、江戸時代から食用に供されていたとされる。戦後、現在の大館市比内地域を中心に、販売目的で栽培されるようになった。市場に出回っている国産トンブリは、ほぼ全て同市産だという。

17年には「大館とんぶり」が国の「地理的表示(GI)保護制度」に登録されている。地域の農林水産物や食品を保護する制度で、これも本県としては初の登録だった。今回の文化財登録は、地域特有のブランドとしての評価の高さをあらためて示した。

料となった。文化庁によると、報告書に挙げられた26の郷土食のうち、トンブリの産地や食材としての希少性が審議会の目に留まったという。

この調査は文化庁が各都道府県に要請し、本県が最初に始めた。トンブリを含む郷土食の伝承に向けた記録作成に率先して取り組んだ意義は大きいといえよう。

トンブリの生産者はピーク時の1990年に138戸だったが、現在は5戸まで減少。生産者はこれを重く受け止め、「門外不出」だった加工技術を公開し、産地の維持と拡大を図ることにした。

昨年6月の市議会で「生産体制は危機的状况」という認識を示した大館市も、今回の文化財登録を追い風に、再興に向けた支援策を早急に検討すべきだろう。

国登録無形民俗文化財に關しては、周知・普及に向けた活動への財政支援を国から受けることができる。こうした支援も活用し、とんぶり製造技術の特殊性や食材としての魅力を広く伝えていきたい。

▲秋田魁新報2025年2月25日付より▼

4

記事Bを読み、記事Aと関連付けながら次の(1)(2)の問いに答えましょう。
(1) 記事Aで「トンブリとなるとぐっと知名度が下がってしまう」と述べられている原因を、記事Bの内容を基にまとめて書きましょう。

Blank box for writing the answer to question (1).

(2) 記事Aでふかわさんが「ある意味で僕の無責任な願い」や「単にノスタルジーで『なくしてはいけない』と外部から強要するのではなく」と、産地継承への思いを控え目に語っているのはなぜでしょう。記事Bで述べられているトンブリ農家が抱えている課題を踏まえて七十字以内にまとめて書きましょう。

Grid for writing the answer to question (2). The grid is 10 columns wide and 10 rows high. The number 70 is written in the bottom-left cell.

